

かたりべ134

豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより

荒川電車営業所 見学レポート



見学の際に案内をして下さった荒川電車営業所の内匠一夫氏。後方には車両を場内で移動させるトラバーサが見えます。



(車両検修所内で点検中の都電 8800 形。)



車両の状況を管理する運行管理システム。停留所に設置されたカメラ映像等も見ることができます。



荒川電車営業所正面。施設の内部では、車両の点検や整備、洗浄を行うことのできる設備がありました。

八月一六日、今後の企画展、収蔵資料展に向けて、普段入ることのできない都電荒川線（愛称・東京さくらトラム）荒川電車営業所内の見学をさせていただきました。当日は郷土資料館の学芸員四名がお邪魔しました。

荒川電車営業所は、王子電気軌道株式会社舟方営業所を前身とし、昭和一七（一九四二）年に現在の名称となりました。車両三三両が所属している荒川電車営業所では、車両の点検や整備作業、洗浄を始め、都電荒川線の運行にかかわる全ての業務を行っています。

見学させていただいたのは、車両の保守管理を行う車両検修所、線路・電線や踏切等の管理を行う保線担当、電気区、車両の運行管理を行う荒川営業所等、敷地内のほとんどの区画を案内していただきました。また、休日に一般開放されている「都電おもいで広場」も、見学させていただきました。広場に設置されている旧型車両は車内に展示設備が設けられ、模型等都電に関する展示があり、郷土資料館における展示の参考になりました。

見学では、文献資料やインターネットの情報だけではわからない日々の安全な運行を支える保守点検の大変さや重要性を体感することができ、細かい配りが必要である点は、資料を扱う学芸員と通じる部分があると感じました。

荒川電車営業所の皆様、お忙しいなかご対応いただき、ありがとうございました。

（郷土 水吉雄人）

としまのどうぶつし

帰馬放牛編



突然ですが馬は好きですか？馬肉も美味しいですし競走馬には美しさやロマンがありますが、身近な動物という印象は薄いのではないのでしょうか？馬は人類が初期に家畜化することに成功した動物の一例で、農耕規模の拡大に大きく寄与することから、かつては既のある農家は珍しいものではありませんでした。また、江戸時代の中山道の様子を描いた史料などを見ると荷物の運搬や人の移動などにも使われており（図1参照）、人々の日常生活に欠かせない存在だったことが判ります。

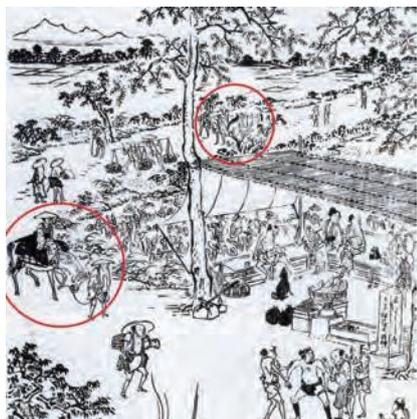


図1 『江戸名所図会』 兼鴨庚申塚（部分）

その一方で、騎馬のような「武器」や物資輸送の「兵站」というように、馬は軍備としても重要視されてきました。世

界的に見れば、紀元前のヒクソスの侵入を始め地中海世界の興亡に大きな影響を及ぼしたことが知られています。日本でも四世紀末から五世紀前半にかけて軍用馬として大陸から持ち込まれたことが、在来馬の飼育の始まりだったと考えられています。同じ大型動物であり農耕にも用いる牛と比べても、貴人の乗り物として「馬車」ではなく「牛車」が普及していたことや、「騎馬武者」という存在からは、馬は本来軍事に関わる存在として認識されていたことが伺えます。

館蔵資料「鑑之秘術」（図2参照）は、

日本の古式馬術の流派のひとつ大坪流に連なる資料ですが、資料中では馬に乗る際の鑑と手の配置等を馬の健康状態や癖により変えるように指南がされています。また、図中の長方形が馬の背にあたり、鑑・鞍・手綱の位置が図示されています（図2青枠①・②）。文中には馬に対しての薬の処方について言及された箇所も存在します（図2青枠③及び左記枠内参照）。この資料からは、馬を一頭ごとに癖や健康状態を管理し、丁寧に世話をしていた様子が窺えます。ただし、これは現在

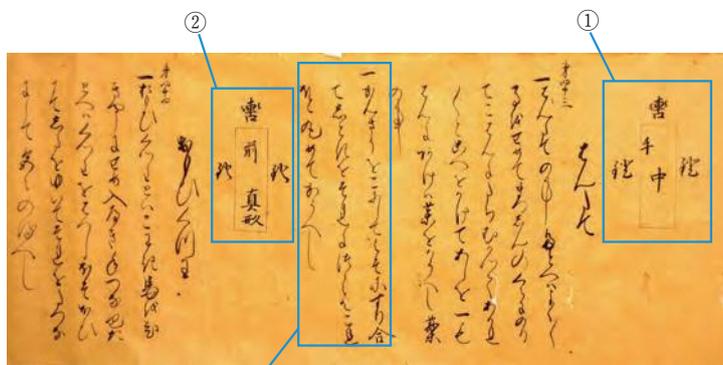


図2 館蔵：慶長十八年「鑑之秘術」（部分）

一 かんそうを粉にして味噌にすり合
て、しどきをそれにつゝみて、これ
らを丸めてかうべし。
*1 干草もしくは甘草のこと。
*2 黍（もち米を蒸して軽く搗き丸め
たもの）あるいはシドキ（山菜のこと）

のような生涯飼育や動物愛護の意味合いで世話をしていたのではなく、有事に備え戦車や輸送車を整備するような感覚で馬を世話していたと考えられています。馬の軍事利用は、明治に入り在来馬か

らアラブ種やサラブレッドに切り替えながら続きました。明治一九年（一八八〇）には軍馬育成所が、明治二九（一八九六）年には陸軍軍馬補充部が創設されるなど、官民で軍馬の育成を行っていました。日清・日露戦争を経て、輸送車や戦車が普及した太平洋戦争でも軍備として馬は用いられていました。戦時中には民間からも軍事供出で生業を支えていた農耕馬が供出されただけではなく、時には人間の代わりに馬が出征するということもあったそう、依然軍備として重要な地位を占めていたことが判ります。

現代の私たちの身の回りでは、馬と触れ合う機会は決して多くはありません。それは都市化の進展や技術の近代化により馬の力に頼る機会が少なくなったからだけではなく、平和な社会が築かれたからだとも言えるのではないのでしょうか。

主要参考文献

- 本村凌二『馬の世界史』、二〇〇一、中央公論社。
- 森田敏彦『戦争に征った馬たち—軍馬碑から見た日本の戦争』、二〇二、清風堂書店。
- 横浜市歴史博物館『横浜の野を駆ける—古代東国の馬と牧』、二〇一九。

（郷土 井坂綾）



牧野 虎雄 くあの人もここを歩いた②



《庭の少女(中庭)》(図1)と《向日葵》(図2)、この二点とともに牧野虎雄

(一八九〇—一九四六)の作品です。

一九二〇年代の一時期、牧野は神秘的と評されることもあるこうした濃密な絵を描いています。これは一九二二(大正

一一)年の神津島旅行の前後から牧野の大きな特徴の一つとなっています。では、似ている点と違う点はどこでしょう。共通点は横位置のカンヴァスに描かれた油

彩作品であること、植物がうねるような葉や茎の曲線の集積で表現されていること、画面の端には背の高い樹木か植物が

あり、暗い色が使われている部分がわずかながら奥行を表現しています。一方、うごめき繁茂する植物(生命体)によつて取り囲まれたような圧迫感は、前者に

より強く生じています。少女が描かれていることがそう感じさせるのかもしれない。これらが少女の夢の中を描いている、という意見もあります。相違点は色

味や植物の種類なども挙げられますが、人と土の有無、そして、空が描かれているかどうかでしょう。

《向日葵》に描かれている空は、《風揚》(図3)にも見られる区内からの眺めのようです。牧野は一九二三年、当時の北



図2



図1



図3

豊郡長崎町(現在の豊島区目白)に渋谷から越して来ます。九七年前は、まだまだ畑や空き地が広がるこうした光景がほとんどでした。今、区内でこれほど広く空が開けた場所はありませぬ。風揚は長崎地域では昔から盛んで、大人と子どもに共通の楽しみで、冬の風物詩でした。竹と紙と糸で作られた長辺が一五〇センチもある昭和初期の凧が郷土資料館の特別展示で紹介されたことがあります。が、そんな凧が揚がっていたのでしよう。牧野自身も凧には一家言あり、凧は見るものではなく揚げるもの、凧を揚げている間は無念無想、子どもが集まってきて一緒に遊べるのもまたよい、と言います。

祖父が故郷新潟で凧作りの第一人者だったことも知られています。子どもの時から、走り出すのではなく糸を引いたりのぼしたり、凧がなくても上空の風を感じ凧を揚げ、グループ槐樹社(かいじゅしゃ)の一九二八(昭和三年)の新年会の席でも、おだやかな日に見事に揚げたそうです。《風揚》の右上に小さく高く、凧が見えています。

それは目白駅から西に少し歩いた鼠山と言われる場所の近くでの出来事です。鼠山は江戸時代に、クヌギが生い茂り薬草がとれキノコも自生した小高い土地でした。近くには河野通勢(こうのみちせい)をはじめ画家たちや劇作家らも住んでいました。

この「あの人もここを歩いた」は、所蔵はしていないものの豊島区に關係のある作家や作品を紹介するシリーズです。そして今回は『かたりべ』一三四号「作品を見る読む16」で、鶴田吾郎の《長寄村》(一九二八年)に揚がっていた凧とも同時代でつながっています。もしかや牧野が揚げた凧を鶴田が描いていたとしたら：想像はふくらみます。

(美術小林未央子)

図1 庭の少女(中庭) 一九二二年

図2 向日葵 一九二三年

ともに東京都現代美術館蔵

図3 風揚 一九二四年

東京都立近代美術館蔵
いずれも油彩・カンヴァス

神輿をハシゴする人々

令和元年の豊島区内神社例祭における神輿渡御を見学しました。日程は下記表の通りです。区内の主な神社例祭は現在毎年九月に執り行なわれています。祭礼時期からみれば、これらは民俗学的には秋祭りとして位置づけられ、農村社会の収穫感謝祭が本義であると考えられています。

例祭では、その神社の氏子たちが、多くは町会ごとにそれぞれの町内を神輿渡御します。こうした町会の神輿には地元住民のほか同好会などと呼ばれる担ぎ手団体の参加が都内ではよく見られます。町会の神輿を着た地元住民とともに複数の同好会がそれぞれの神輿を着て神輿を担ぐ姿は、祭礼の盛り上がりに一役買っています。

同好会に担ぎに来てもらった場合、今度は来てもらった側からそれぞれの同好会が地元とする神社の例祭へ行つて神輿を担ぐことが暗黙の了解です。担ぎ手たちは特に夏から秋にかけて忙しく神輿を担ぎまわることから、担ぎ屋さんと呼ばれることもあります。こうした関係を保ちながら地域祭礼の維持に努めている例は珍しくありません。重量のある神輿は

- 9月7日(土)・8日(日)
大鳥神社、子安稻荷神社、氷川神社(高田)、長崎神社
9月14日(土)・15日(日)
天祖神社(南大塚・16日にも渡御が行なわれた)、天祖神社(文京区本駒込・豊島区内にも氏子町会がある)、日枝神社、氷川神社(池袋本町)、妙義神社
9月28日(土)・29日(日)
御嶽神社(池袋)

ずっと同じ人だけで担ぎ続けることができず、担ぎ手を交代させながら渡御することになるため、多くの人手が必要になります。神輿はなんといっても大きくて重量がある方が担ぎ手には担ぎがいがあり、見る側にも見応えがあります。大きな神輿をつくれれば担ぐのに二〇〇人以上の協力が必要になることもあります。

さて、以上は大人神輿の話ですが、地元の子供たちも神社例祭では子供神輿を担いだり太鼓山車を曳いたりします。近年の状況として、この担い手が減ってきたという話がいくつかの神酒所(しよ)で聞かれました。それは少子化の影響だけではないようです。子供たちは習い事に忙しく、室内で遊ぶようになったため、まだ日が暑い時期に神輿を担いだり太鼓山車を曳いたりしに外へ出たがらないのだろう

といえます。そうはいつても、こうした機会に顔を合わせておくことは防災・防犯の意味でも重要視され、当日の飛び入り参加の受入れや神輿の無料貸出しをするなど、各町会は工夫をこらしています。一方で子供たちが目当てにしているのは、参加した人に配られるお菓子です。SNSや携帯電話などを用いて子供同士で連絡を取り合い、どここの町会神輿に参加すれば豪華なお菓子が多くもらえるか情報交換しているそうです。地元町会の子供神輿渡御が終わってから、神輿を着たまますぐに隣の町会の子供神輿を担ぎに行く様子も見られました。渡御時間の異なる神輿をハシゴすることで神輿を担ぐ人数も増え、子供たちもたくさんのお菓子がもらえるというわけです。

今回、調査にご協力いただいた関係者の皆さまに御礼申し上げます。(郷土 鄧君龍)



駒込3町会連合の神輿渡御
(令和元年9月15日14:22撮影)

編集後記

年末に向けて慌ただしい時期になってまいりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。「かたりべ」二二四号をお送りいたします。郷土資料館では、小学三年生の「くらしのうつりかわり」という授業のために、例年一月から翌年二月にかけて、区内の小学校から団体見学の申し込みがあります。資料館が収蔵している資料を見たり、触ったりして今と昔の道具の違いやどのように変化していったかなどに興味を持ってもらえるような体験型の解説を行ってきました。しかし、度々お伝えしている収蔵庫の移転に伴う資料の整理作業を実施するため、今年度は昔の道具を郷土資料館で展示し、触れていただく機会をつくるのが困難な状況になっています。こういった小学生の見学の場合、引率される教員の皆様との打合せの場を設けています。解説と自由見学時間の配分や、どの展示内容を詳しく解説するか等、学校ごとに頂いたご要望を反映するため、解説の内容は多種多様です。また、小学生に説明する場所には、今学校が建っている所は昔こんな場所だったというようなクイズを挟むなど、自分たちの暮らす地域の歴史に興味を持ってもらえるような解説を心掛けています。小学校に限らず、団体見学を受け付けておりますので、ご希望の際には当館までご連絡ください。(編集 水吉雄人)

かたりべ
No.134

2019年12月6日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4
としま産業振興プラザ7階

電話 03-3980-2351

URL

<http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/shiryokan/index.html>



東アジア文化都市2019豊島
Toshima City of East Asia 2019 Toshima
はらばらな文化がいっぱい